

# La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

「フランス語の話し方、書き方教本」(訳)

福 井 秀 加

I [fol.1<sup>r</sup>] 我々は始め、このように言う：父と子と聖霊の御名によりてアーメン。

さてここに美しいフランス語を正確に話し、また書くすべをお前に教える「言葉の用い方教本」が始まる。これはフランスの言葉の使い方、習慣に従っているものだ。

先ず最初、この必要な仕事を始めるにあたり、我々は敬虔な心を以て神と、いと優しき御母、至福の処女マリアならびに天の聖なる王国にいます諸々の栄えある方々に祈りを捧げよう。神はその天国に神の友、選ばれた者を置き給うた。あらゆる至高の学問、知恵、恩寵と理解、あらゆる美德がその高みよりよって来たる。神の慈悲深き思い召しと恵みを以て、この書を学ぶ全ての人々を高邁なる善知識と理解の恵み溢るゝ露に浸し、啓発し給わんことを。

さらにこの人々が、この世で他の如何なる言葉よりも尊敬され、且つ愛されている必修ラテンについて、最も美しく優雅な言葉であり高雅な話し言葉のうましフランス語を、正しく発音し書くための学習に生来の理解力を示すよう導き給え。とりわけフランス語は凡そ神御自らの栄光を称えるためにかくも甘美にして愛すべきものとされたのである。それ故フランス語はその大なる甘美さと美しさの故に、天上の天使たちの話し言葉にも匹敵し得る。

人間はこの世の中で最も高貴であり、尊厳ある生き物であるから、神は人をその配下にある全ての生きもの、事物の支配者、主<sup>あるじ</sup>であれと命じられた。故に私は人間について、又人間の身体の各部について [fol.1<sup>v</sup>] そして人間に関して、また人に起こり得る全て必要な事柄についてはっきりと明示し、説明するところから始めよう。

記憶すべきは人間の身体が12の部位に分かれているということである。賢明なる哲学者の述べる如く天の黄道十二宮がこれを支配する。この天の黄道は月が人間の身体の部位に符合する十二宮のひとつに入る時、今述べた人間の部位にたいして大なる影響と支配力をもつものである。さて私の親しき友よ、人間というものがさかさまの木であると、知って欲しい。即ちその幹と根っこは逆立ちしており、てっぺんは枝と共に下方にある。

## La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

人間の頭がそのようになっている。頭は一番高い所にあり、主要な部分であるがそれは木の幹にあたり、髪の毛は根っこにあたるのだ。

また次のことも知っておきたい、人間にはいろいろな部分があるということ。額 la front だとか、耳 les orailles, 目 les yeux, 眼瞼 les paupieres, 眉 les surcilles, 鼻 le nase, 鼻孔 les narines, 軟骨 la tendron, 頬 les jouves, 口 la bouche, 唇 les lievres, 歯 les dens, 舌 la langue, 顎 la menton, 喉 la gorge, 首 le col, 甲状腺 le vendon, 肩 les espaulles, 肩甲骨 le blazon, 脇 les asselles, 腕 les bras, 肩先 les mahutres, 肘 les coubtes, 手 les mains, 指 les deis, 掌 la paulme, 爪 les ongles, 関節 les jointes, 胸 la poitrin, 乳房 les mamels, 肋骨 les costes, 脇腹 les flans, 背中 le dos, 骨 les os, 脊椎骨 l'escine, 腹 le ventre, 臍 l'ombril, 恥丘 le penil, 生殖茎 le vit, 精巣 les cueillons, 肛門 le cul, 腰関節部 les hanches, 腿 les queuses, 鼠径 la lene, 膝 les genoilles, 脚 les jambes, 外腿 la garette, ふくらはぎ le assure, 踝 la cheville, 足 les pies, 踵 le talon, 足指 les artols, 足の裏 la plane du pie, 内臓 les entrailles du corps, 脳 le cervel [fol.2<sup>r</sup>] 咽喉 le gorger, 胴体 le corps, 心臓 le cuer, 肝臓 le foye, 肺 le polmoun, 脾臓 l'esplien, 腸 les boeaux, 胃 l'estomac, 血管 les veines, 神経 les nerfs, 髄 la rate, 胆嚢 le fiel, 腎臓 les reignons, 腰 les reynes, 膀胱 la vessie、皮膚 la pel、および4つの体液、即ち胆汁 colre, 血液 sang, 粘液 fleume、黒胆汁 malencolie など、というものである。

II. さてこれから我々にとって必要な事柄とその話し方とを述べよう。

館の主が一人の騎士、あるいは騎士見習い、又は部屋係、あるいは他の下僕の一人、もしくは従者の若者にむかって言う：「衣裳係を私のところへ呼んでおくれ、直ぐに来るようにと伝えなさい。」「かしこまりました、御主人様、直ちにお言付通りに。」と、それから騎士見習いは衣裳係のもとへと行きこのように丁寧にする：「ギョームさん、神の御加護を！」〈あるいは〉(vel sic)：「神のおひきたてを！」と。「私の親友、よう来られた。私にできることで何かお望みかな」「え、その通り、旦那様がすぐ来いとお呼びになっている。承知の助だろ、ぐずぐずしていると旦那様はあんたに腹を立てられる。だから、まごまごせずに、あちらへさあさ急いだ、急いだ。」

「どんな御用か知っているのかね」「神かけて、知らないよ。しかし、御主人様の御入用の品々を買うんだらうからお昼前に行かないと、と思いますね」

そこで衣裳係はできるだけ急いで主人の許へ出向き、うやうやしく次のように言う：「御主人様、何かお気に召しますことは？」〈あるいは〉[fol.2<sup>v</sup>]「御主人様、何か御用向きは」「行きつけの布地屋へ行って欲しい。そこで上等の深紅のを12棹(1棹ほぼ1メートル強と思われる)真赤を6棹、青を8棹、緋色を9棹とそれに同じく紫と茶色だ。それに白も15

## La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

棹。それから小間物商のところで10オーヌ (aulne は肘の長さで測るという) の金色の布と赤い純絹の布1枚、それに30オーヌの白いファスチアンあや織りと又同じく灰色のファスチアンあや織り、ランスの布地 20オーヌとそれに同量の亜麻布だ。

全部そのようにして済めば、持ち帰って衣裳棚へ入れ、そこで袖なし外套と小型のマント、大きなホップランドコート of the long and the short、長い飾りリボンの付いた巾広い頭巾、腰と尻を覆うかなり長いズボン、そして同じようなしつらえの長いくつ下を裁断しておく。それから、胴着、短いチュニック、胸の開いたチョッキ、短い上着に裁断して仕立てるように。お前が出来る限り、且つ工夫して仕事を下働きの職人にさせ得る最良の方法でやっておくれ。さっき言っておいたランスの織物20オーヌと亜麻布は経帷子、下着、儀式用ズボンを作るためにしまっておくと承知して欲しい。尚、腕の立つ、また急ぎ仕事のできる職人を沢山集めてしっかりと縫製した良い仕立てをさせるように。職人の仕事に失敗や手抜きがあってはならない。[fol.3<sup>r</sup>]立派な仕立てをしなかったために、直ぐにも形がくずれ、縫目がほころびるなどは職人の赤恥だからな。

さて現在のところ、私の身分にふさわしい家の管理や何やらは、この館に来たばかりだから充分には出来兼ねるので、管理人にいろいろ調度を整えさせたいと思う。まず、私の寝室には厚みのある平板に寝台用の藁蒲団、それを購入したら大工あるいは寝台作りを来させ、寝台を組み立てて藁蒲団をはめ込ませる。それから執事は寝具や附属品を買いに行く。

すなわち、掛け蒲団1枚 un couverture, ベッドの頭部をもち上げる長枕 testre avec la sileure, カーテン les courtines, サージ織りの布 une sarge, 経帷子2組そのうちの1対はランス織りで、あとの1対は上等の亜麻布のもの deux pair de linchiaux, 毛布2枚 deux blankettes, 羽蒲団又は装飾用寝台掛け une keulte ou une keutepyont (OF colte, cueute pointe ca.1180) 長いクッション付の枕2つ deux orailleurs avec un long coissyn, 麻の丈夫なシーツ1枚 canevas de chanvre など。

広間用に購入する品は背のたかいテーブル desse, 立派な壁掛けタピスリ grant doseur と台に掛ける厚布 les tapis bankeurs, クッション quarreaux, テーブル tables, 架台 briches, 酒杯用卓 tables pour hanapes, 長椅子 banques, 椅子 chaires, ベンチ fourmes, あんか scelles, 平板 aes, 平水鉢 bacins, 火鉢 chauffouers と吊下げの手洗い鉢である。

厨房についてはテーブルクロス napes, ナプキン touuailles, 長いクロス longres, 銀カップ tasses d'argent [fol.3<sup>v</sup>] 柄付杯 gobles, マドラス木杯 madres, 壺 terrins, 皿 plas, 碗 escuelles, 純銀の皿と小匙 sauciers et cuillers tout de fin argent を買うこと。

厨房の品物は食器棚 dressouers, 赤銅の鍋 pos d'arrein, 大鍋 paelles, 三叉串 troipies, 焼き網 grailles, 鉄串 hasles, 鉄の掛け金と肉焼なべ crockes et lechefris de fer, ふいご souffletes, 井戸の滑車と釣瓶 cackes et sielx pour le puus である。同様にまた、冬に備え

て多くの薪が必要だ。

私の靴屋には、12足の切込み模様のある靴 *soliers escoletez et partusez*, と裏皮の靴 3 足 *soliers escorchez* を作らせ、また私の馭者のために 2 つ結び目のある靴 5 足を作るよう話しておく必要がある。

また、私の管理人がやがて来たる花の復活祭のために、私の口に合う 4 樽の赤葡萄酒、それもこの地方でみつげられる最上のものを手に入れておくようにと望むのだ。というのも、私は大いに飲んだり、食ったりするだろうから。

III. さあ、国許を遠く離れて馬で旅をしたり、あるいは徒歩で旅をしようとする人が道中どのように振舞い、どのように話すべきかについて語ろう。

まず、主人は出発に先立ち召使いにこう言う：「ジョナンよ、あるいはヨハン、ジャック、ピエール、ペラン、ペロット、ポール、あるいはギョームであれ、ギルミノットであれ、さあ、こっちに來い」〈あるいは〉「こっちへ來なさい！」「御主人様、できるだけ急いでやって参りました」「ジョナンよ、準備しておくれ、私の馬を鍛冶屋へ連れて行き、必要なら金具を打たせろ。良く打ち込んだ頑丈な蹄鉄にするのだ」「はい、そういたしましょう。」

それから [fol.4<sup>r</sup>] 召使いは馬数頭を引いて鍛冶屋へゆき、主人のいいつけた事を行う。召使いが鍛冶屋から帰るや否や主人は次のように話す：「ジョナンよ、済ませたか」「はい、たしかに。」〈あるいは〉「はい、しっかりといたしました。」「では、すぐ馬どもに干し草、大麦、そしてパンをやれ。というのは、私は朝食が済めば直ちに馬で出掛けることになる。多分すぐに戻ってくるだろう。地方の領地で仕事が山積しているからな。ジョナン、食卓を置いて支度せよ、ちょうど食事をするによい時間だ。」「かしこまりました、御主人様。」

召使いはテーブルを置きに行く、よい工合の長さにテーブル覆いを掛けて、それから塩つぼと水を半分満たしたコップを運び、食卓に置く。そこでパンを取りに行く。干からびたのではなく、よくふくらんだつるつるした、このあたりで見られぬ程の白い良いパンと、大層上品で口あたりの良いボルドーのすき透った赤葡萄酒と白葡萄酒を探しに行く。さてそこで主人は侍僕の一人にむかって、あるいはお気に入りの誰かにむかって、物腰も柔らかな調子でこのように言うのだ。「ジョナン君、調理場へ行って食事が出来上がっていないか尋ねて欲しい」「御主人様、御言い付けどうりにいたしましょう。」そして彼は全てが準備されるよう見届けるために調理人のところへ話しに行く。そうこうするうち、[fol.4<sup>v</sup>] 主人は手を洗い席につきにゆく、そうすれば侍僕や召使いが美味しい肉を給仕するのだ。というのは、まず第一のコースとして、夏であれば蕪のスープ *de soupe des naveux*, 冬であれば 鶏肉とキャベツ *des chous de porree*, あるいは脂身と豆の煮込み *des pois*

## La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

avec la larde, 又は裏漉しのピューレ de purée が供される。そのあと牛肉 de boef とか羊肉 moton, 豚とか仔牛 porc et vial のこつてりした肉料理である。第二のコースとしては、とり肉料理 de chapons, 雄鳥 gelines, 雌鳥 pulles の大きなパテが出る。第三のコースには卵 des ouves, 子豚と雌豚をとり合わせたもの petits porceus et porceletes jostees, 白鳥 cines, つる greus, かささぎ heyrons, サンカノゴイ bytores, ちどりにうづら pluviers et pardriz, その他いろいろ野鳥の肉である。最後にはチーズ de fromage, 梨 poirs, りんご pomes くるみ des noes など。大いに食べたあとで主人がこう言う：「さあ、食卓をさっさと片付けてくれ、ジョナンよ、馬に鞍を置きに行くのだ。しかし口の中にはみを入れる時、黒馬にはよく注意しろ、噛まれんように。鞍を置いたら馬を広間の戸口の前へ引いておいで、そこで私が馬に乗るから。」主人はやおらやって来て馬に乗り目的の道に行く。町のはずれまでくると、みすぼらしい一人の老女、あるいは別の女に尋ねるのだ：「おばさんよ、オルレアンへ行く道はどれかね」「旦那さん、教えましょ。この道を真っすぐ馬に乗ってお行きなさい、谷間のところ [fol.5r] までくると、ちょっと前方に生垣が見えましよう。そこには道が二筋あって十字架が立っております。その十字架を右手に見ながら左の道を進むんですよ。そうすると大きな森が見えます。悪者が沢山隠れているという噂だから、旦那さん、泥棒には注意しなされ。ひどいわるさをするんだそうで。神のお導きにより、あなた様のお気に召す何事にも栄えと喜びがありますように。」「美しい奥さん、神と共にあれかし。」〈あるいは〉「あなたに神の御加護を。」さて、この旦那は道を進み次のような、あるいは又別の、自分の気に入る唄を歌い始める：

ほうら、ほら、我等仲間に  
今年は葡萄の当り年  
心も想いもくれてやる  
我等は楽しい仲間たち。  
飲んだり、飲んだり、このエキス  
黒い葡萄のしたたりを。  
唄えや 踊れ、今年は豊年万作だ  
神に感謝のひと踊り。  
良い酒なしには  
うれしい祭りも始まらぬ  
ほうら、ほら、甘く切ないこの酒は  
人を笑わせ唄わせる。  
貧乏人は金持だ  
パンやお金がなくっても  
お酒の功德で金持ちだ

酒の御利益ありがたい。  
どけちの財布もゆるみます  
あとの後悔先立たぬ。  
娘さんたち  
落穂を拾い [fol.5<sup>v</sup>]  
家に帰れば思い出す  
楽しい仲間のお遊びを。  
3人、4人と集まって  
口を揃えてこう言うよ  
飲もうよ、みんな、  
ちっちゃな瓶でぐいとやり、  
愉快的気持ちになりましょう。  
さあさ、行ったり、酒倉へ  
恵みの葡萄酒  
開けよじゃないか  
葡萄を植えた葡萄作りの  
長き幸せ、長寿を祈り  
この葡萄酒をあけよじゃないか。  
これは美味しいぞ、  
俺の心はとろけたぜ  
とろけるロゼが  
おいらに歌を唄わせる。  
この葡萄酒は、  
頭にくるわ  
うちの内儀さん、足さかさに  
ぶっ倒れさせてしまうまで。

彼は歌を歌い終わると侍僕あるいは侍僕たちに次のように話し始める：「さあ君たち、まもなく夜になる」〈あるいは〉「やがて夜になろう」するとジョナンは自分の主人に大層丁寧にこう答える「さようでございます御主人様、まことにさようで。」〈あるいは〉「そのようでございます。」〈あるいは〉「仰有るとおりで。」「今日は先を急ぐより、この町に泊まった方がよかろう、どう思うかね」「御主人様、思し召しのとおりでございます。」「ジョナンよ」「はい、旦那様」「先に行ってすぐに宿をとっておいで」「さようにいたします旦那様。」そこでわきめもふらず道を進み、宿に行き着くと大変鄭重にこのように言う：「宿の御亭主、御亭主殿。」すると宿の主人は前者に奥からまったく横柄に答える「何だ、誰なんだ

ね」「この怠け者、何でお前さんは私が呼びかけた最初に返事しなかった？」[fol.6<sup>r</sup>]〈あるいは〉「私がまず戸を叩いた時、どうして返事をしなかったのだ。神かけて災いをふりかけてやるぞ。あんたはここで私を長い間ぼんやり待たせたんだぞ。知ってのとおり、今日ほど寒いのは今年始めてだ。雪は降るし、あられもみぞれもひどいもんだ。水は凍って足の甲みたいになってるじゃないか。凍てついた氷はなかなか溶けないて。さあ、早く戸を開けてそこへ入れて呉れ。さもないと、戸をめちゃめちゃにぶち破るぞ、本当にやるぞ！」

「さあさあ！あなた、そんなにかんかんに怒りなされるな、すぐ開けますからに。」宿の主<sup>あるじ</sup>は急いで戸を開けにかかる。戸を開くと、戸を叩いていた人間を見て、彼に言う：「聖マリア様！驚いた、ジョナンさん、あんたでしたか」「そうともさ、私が見えないか」「ジョナンさん、親しい友だちよ、気を悪くせんで欲しい。あんたが其処にいるとは思ってもみなかった。さてさてあなた、御機嫌損じたならどうか御勘弁願いたい。充分つぐないはしますよ。ジョナンさん、心から信頼しているから是非頼むのだが、私がやったことをそちらの主人には言い付けないで欲しい、もしわかったら、そりゃ気を悪くされるだろう。私は御主人のお気に入らんことになる。」[fol.6<sup>v</sup>]「君、そんな事は心配せずともよい、君が良い友達づきあいをしてくれるのなら、そんな事は言わないよ。」「誓いますよ。親友さん、すばらしい友達になりましょう。私ができることで何かお望みなら、それがお前様のお気に入るなら、言って貰いたい、できる限り喜んでやりますぞ。私は常に、今もこれからもあんたの言う事は聞きますよ。」「それじゃ宿の御亭主、ここの泊まり心地はよろしいかな、言って貰いましょう」「はいはいお客様、お蔭様で…王様のお泊まりを仰せつかっても充分お気に召すような、行き届いた誠実な宿でございますよ」「さて、そのようではあるが。」

そこであるじは次のように答える：「こちらへ来てみて下さい、お客さん御一緒に。さっそく一番綺麗な一番居心地の良い部屋を見て貰いましょう。これまで見たこともない程一層立派に金や絹の布で飾りつけし、しつらえてある部屋です。しかしまず、錠前を開けるための鍵を探してきましょうや。」彼は戻ってくると戸を開け中に入り、相手に言う：「さあ、この部屋のあたりをぐるっと見廻して下さい、どうですかね」「成程、御亭主、結構な工合で私の気に入るようだね。又、別の点でも大層気に入りますよ、部屋はしっかりとまじめにホウキで掃いてあって埃も塵もないからね、というのは、蚤もしらみも他の虫もないだろう」「虫なんかあなた、絶対におりませんよ。うけ合って言いますが、皆さんはここで快適にお泊まりになれます。[fol.7<sup>r</sup>]勿論ねずみや二十日鼠がたんとおるのは御承知のところだが、それは皆さんにはどうでもよろしいことで——というのは以前に私が作った巧妙な道具、網や仕掛けでねずみ共をしっかりとつかまえるように言い付けときました。もっとも鼻高々で言ってるんじゃないですが。ジョナンさん、さあ聴いて下さいよ。御主人は今夜ここに泊まれるかね」〈あるいは〉「御主人さんは今夜ここへ見えるでしょうな」「そりゃ本当ですともさ、しかし、御主人が仲々御ゆっくりなんで不思議に思っているところ

ろだよ、というのは先ぶれのために旦那様を後にした時、ここからもう3哩程のところだったから。」「御主人が間違いなく今晚来られるとお前様は知っていなさるのか」「誓って、そうとも。」「それじゃ、まこと私は鳥屋へ行って、にわとり、食用の雄鶏、鴨や小さい野鳥などと夕食のために買うとしましょうや。」「宿の亭主、まずはさあ、薪を切って暖かい火を頼むよ、今日はとても寒いんだから。」

さてそれから道に出て鳥屋へ着くと、(この場合宿の亭主 hosteler が行ったのかジョン Janyn が行ったのか文脈は曖昧になる) 次のように尋ねる：「さて御亭主、これはいくらぐらいのものですかね」〈あるいは〉「おかみさん、これをいくらでわけてくれますか」〈あるいは〉「これでいくらになりますか」〈あるいは〉「この河あひる三羽でいくらですか」  
「旦那、10ドニエいただきます」「あんた、それは高すぎる、半値で充分だ」「何をおっしゃる、この河のマドラデル三羽には9ドニエ払って貰いますよ。つまりこれは本当に逸品でして…肥えて脂ぎってますから。うけ合っても良いがこれから先二年経ったってこんな良いやつにお目にかかったり、食べたりはできませんよ。[fol.7<sup>v</sup>] さあさ、よう見て下さい。もう脂ではち切れてるでしょうが。」「ふむ、ふむ、よう分かる。しかし、また法外にふっかけたものだ」「めっそうもない！旦那、私がこうと思えばですね、今日でもあしたの朝でもこのあひるは10ドニエで売れますぜ、これは信用してもらわにゃ」「そんなに力<sup>りき</sup>むことはないって。それ以上言わんでも最初の言葉でわかっているよ。さあひと言、いくらにするね？」  
「こりゃ絶対に、その値段をいただきます。さもなくば売りません」「やれやれ！今年取引した商売のうちでお前さんは一番高値をつける人だ。ほかではこの三羽と同じに良いやつでも7ドニエで手には入るさ。しかしまア仕方がない。この次にはもっと良いのが見つかるだろう」「パウロ様に誓ってこの値段でこんなに良いのは町中にありませんや、これより上等のあひるなんかお目にかかったことはない筈でさあ。」「それじゃそれを貰おう、ほらここにあんたの金だ、あんたを神にお委せしよう」〈あるいは〉「神のお導きを！」〈あるいは〉「守り給う神に！」〈あるいは〉「神と共に！」〈あるいは〉「神の御加護を！」  
「旦那さん、健康とやすらぎを神が下さいますように！」

そこでジョンは宿へと帰り主人の夕食のために肉の準備をする。彼は帰ってくると、水を一杯張った鍋を火にかけ、鍋が沸騰し始めると、あひるに火を通すために鍋の中へざぶんと浸ける。それらか急いで羽を抜く。羽を全部 [fol.8<sup>r</sup>] 抜き終わるとすぐ尻尾を切る。指をあひるの胴体の中に入れて内臓と汚物を全て引き出し丁寧に水で洗う、それからローストするために焼きぐしに刺し、すっかり出来上がって十分に焼けると串からはずす、その頃主人が宿にやってくる。

そこで宿の女主人あるいは娘が出迎えて客にこのように言う：「旦那様、よくいらっしゃいました」〈あるいは〉「よくおいでなさいました」《もし、馴々しい言い方をすれば、それは疑わしい言い方だが》「旦那さん、ようこそ」「奥さん、御機嫌はいかがかな」〈あ

La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

るいは「お内儀、どうしているかね」〈あるいは〉《次のように言う》「奥さん、あれからずっとどうしておられたか」「まあ、神様とあなた様のお蔭で、お元気なあなた様よりなおびんびんいたしとりますわ」「そりゃ大いに結構」「旦那さん、長いことお目にかかりませんでしたわね」「その通りだよ、さて美しい奥さん、教えておくれ、いつも貴女の所にいた美しい娘さんは一人もおりませんか」「お客様、お気に召すなら、大層綺麗な上品な身体つきの娘が二人おります、両手で握り締められるほどのきゃしゃな娘でございますよ。」「それでは是非その娘さんをここへ連れて来て貰おう。その娘達を見る迄は馬から下りませんぞ」[fol.8<sup>v</sup>]そこで娘達が客人の前に現われる。客曰く：「これはこれは、この前逢った娘さんよりずっと身体つきも良いし、ずい分美しい女性だね。是非とも私のN壯園と一緒に暮らして貰えるとよいが。この娘たちには金や銀やほかの財、いや館までくれてやろう。」そこでやおら客は馬から降り娘の名前を尋ねて言う：「可愛い、恋人たちは何という名前なのかね」年かきの娘がこのように答える：「御主人様、お気に召すなら、私の名はイザベルと言います」そして他の一人が言う：「御主人様、マルガリータでございます。あなた様が善行をほどこされる御恵みを神が下さいますように」「イザベルよ、さあこっちへ来なさい、さあ」〈あるいは〉「さあ、優しい恋人、私のところへいらっしゃい、遠慮せずに。ひどいことはしませんよ、それは約束する。神も御覧あれ、やさしく大切にあつかうよ。」「はい喜んで、旦那様のお言い付け通りにいたします。」そこで客は娘を抱き、甘い口づけをする。それから優雅に情熱的な愛情をもって、恋する男の調子で次のように言うのだ：

やさしく美しい恋人よ  
つとみやびやかなる人よ  
私はお前に愛を捧げた  
花の衣装で飾った君は  
私がぞっこんの御主人様だ  
花園に咲くいとしのバラだ。  
しなやかな姿の恋人よ  
私は君に心を捧げる  
私の愛と、あらゆる楽しみを、  
美しい一折の花のように大切なお前に。

それから客人は彼女の手をとり広間へ行って言う：「娘さん、夕食を一緒に食べよう」  
「有難うございます。お客様」[fol.9<sup>r</sup>]そこで彼は召使いの名を呼んで尋ねる：「ジョナンよ、我々の夕食の支度は出来たかね」「はい御主人様、どうぞいつでもお座り下さい」主人は席に着きあたりを見回して言う：「あ、まだテーブルが置いてないじゃないか」そうして召使いたちに腹を立て始めこのように言う：「お前たち二人にはろくな一週間にならぬぞ」〈あるいは〉「お前たちは痛い目にあわせてやる。絶体に。私がお前へ到着してか

らというものお前たちは一体何をしていたのだ。夢でもみてぶらぶらしていただけてはいか。すぐに食卓を置いてただちに赤葡萄酒のクラレットか白かを飲めるようにして持って来い。喉がからからだぞ、それに腹も空いた」「はいはい、お言い付け通りにいたします、旦那様」この主人はやがて酒を飲み終え、娘も飲むと、彼女にこんな風に言う：「さあ恋人、こっちへ来なさい、この私の前の椅子に坐るのだ」「お客様、それはどうぞお許しを」「おやおや！そうして貰わんと」「有難うございます、それでは」そうすると客と娘には大層味の良い夕食が供される。客は満足した顔付で大いに喜び言う：「娘さん、どんな工合かね」「旦那さん、喜んでおりますわ、神様とあなた様のお蔭で」「まことに私も嬉しい、どんな人にもましてあなたを歓迎する、是非あなたが気に入る食事をさせてやりたい」「まあとんでもない、充分です、おかげ様で」客は娘に言う：「おや、もう食べないのかい」「あら、いただきますわ旦那様。有難うございます」「では見ていよう」[fol.9<sup>v</sup>]二人が食事を終えるや否や客は娘を愛撫し始める。彼女の愛と処女性を獲得するために、彼女に対して感じた愛の大いなる残り火ゆえに、この世で一番甘美な愛に満ちた唄をこのように口ずさんだり大層やさしげに歌ったりするのだ：

愛情こめて見つめる美しい目差しが  
私の心にいとしさをそそぎ込む  
お前と私が目と目を見交すと  
全身の血は失せてその目に吸い込まれてしまう。  
お前の優しい魅力で有頂天の私は  
いくら見とれていても見あきはしない  
お前の姿を心にしっかりと描きとめたから  
他の思いがは入り込む余地はない。  
こんなに嬉しい思いをしているのだから  
お前を忘れるなんてぜったいにないのだよ。

《ここに最も楽しいうたが終る》泊り客はこの唄を歌い終えると娘に大層やさしく話しかける：「ねえ私の恋人、この唄仲々上手に歌っただろう」「さようですねお客さん、非常に上手く歌われましたわ、心も身体もすっかりのほせ上りましたもの」そこで客は娘の手をとり、男一匹に誓って、一生ほかの女を相手にしないとはっきり約束して言う：「さあ私の恋人、お前さんを私の伴侶とするよ、この点について確約する」それから客は娘とたわむれ、遊ぶので、全ゆる快樂やおふざけのうちに彼の心は有頂天となって、宿のおかみさん、召使連中、部屋付きの者たち、従僕たち [fol.10<sup>r</sup>] に多くの美しい贈り物をする。つまり、宿の女主人には緑の薄絹の美しい腰帯を、召使には3スー4ドニエの銀貨を与え、従僕連中には巧みに丈夫に作ってある緑ピロードの財布を一個ずつ与える。財布には赤い純絹の紐がついている。そして12ドニエの銀貨も入れてやる。客人と娘、それから身分の

ある客の友人たちが皆彼と楽しみ、驚くほどの遊興をする。客の主人は従者の楯持ち、侍従たちにスパイスと飲物をもってくるように命じる。すぐさま、楯持ち、侍従たちは蠟燭を沢山持ってやってくる。ゆうに50本はあるのだ。其処へ全ゆる種類のスパイスが一杯は入った、サラセン風の宝石作りの美しい盃をもち込む。それから彼等は上等のビールと上等の葡萄酒を持って来る。つまりクラレットに赤葡萄酒、白葡萄酒だ、また、ひとつ、ギリシャの酒のような甘いワイン、ヒポクラス、モントローズ、リュネィ、ベルナージュ、アルボワザン、アルサスのオゼイ、香料入りのクラレイ、その他手に入る限りの酒類である。そして又他の飲料、サイダーのようなもの、梨のサイダーや香料入りビールの甘いブラゴットなども持って来る。その時、客の主人の前に角笛吹きやラッパ吹きがクラリネットやフルートを持って現われ、角笛やクラリネットを吹き鳴らす。すると客の主人、楯持ちたちは真夜中になるまで大いにしゃべり、踊り、踊りの組をくみ、身体をゆすりそして美しいキャロルを歌うのだ。このように騒いですっかり疲れ果て[fol.10<sup>v</sup>]もうそれ以上踊れなくなると主人はまわりの優雅な友人たちに言う：「さあ皆さん、寝<sup>やす</sup>む時間となりましたよ。もう真夜中過ぎて一時に近い、だからさっさとやすみましょう。私は横になればもうぐうぐうですな」「ほら、ジョン、恋人を部屋へ案内しろ、靴と服をぬがせてやりなさい。私が部屋に入ったら一緒に寝むためにすっかり準備が出来ているように」そして客の主人はやってきて大満足で恋人と寝床に入り彼女に接吻をし、かき抱き、片腕を首の下に置いて彼女に対して親しく夫婦の間柄にあるやさしさと愛撫を与える。朝になると彼は非常に早く起きて部屋付きの者の名を呼ぶ：「ジョンよ、まだ寝ているのか」「いゝえ、どういたしまして旦那様」「では何をしている」「旦那様、夢を見ているんでして」「目を覚ませ、悪魔と母親とにかけて、何でもよいから起きろ。昨晚お前に言い付けておいたように何故早く私を起こさなかったか」「旦那様、誓って申しますが、お起ししましたよ」「何だと！お前は喉の奥で嘘をついている、一体今何時なのだ」「御主人様、まだ朝早うございませよ」「そんな事はどうでもよい」〈あるいは〉「それはかまわん」〈あるいは〉「つまらぬことを」〈あるいは〉「それは関係ない。」「ほら、起きろ」〈あるいは〉「さあ、すぐ起きるんだ」〈あるいは〉「さあ尻を上げて朝食の支度だ。」

さて主人は起き出し、シャツを自分で着て、胴着と大きなコートをつけ、靴を履く。全部を身につけて[fol.11<sup>r</sup>]準備がととのうと部屋の隅の窓の所へ行き手を洗う水を貰う。手を拭くタオルも、其処へ持って来る。宿の女主人が現われこのように言う：「御客様昨晚は如何でございましたか」〈あるいは〉「昨晚お休みになれましたか」「あゝ結構でした。おかみさん有難う、しかし少々気分が悪くてね。沢山飲みすぎたし、夜ふかしをやらかしたから。ジョンよ、櫛を取っておくれ、あの娘が髪をとかしつけてくれるだろう。馬に水をやり大麦とかいばをやるよう馬丁に言い付けろ。それからいきの良い魚をどっさり注文するんだ、鰻 anguilles に、やつめうなぎ lampreous、その幼魚 lamprals、生鮭

samon fraisse に塩鮭 et saleie、せたかうお bremes、にしひめじ roches、パーチ perches、舌びらめ soles、かれい pleiz、バーベル barbels、あさがおくらげ lucas、鱈 leynges、鱒 treyte、河ひめます grepet、小鱈 cedeleynges、干鱈 merlankes、つのぎめ butynges、塩魚 poisson saleie、ひらめ platoun、とげうお espineis、かじか魚 carbouel、きたのかまつか gojoun、ぼら mullet、塩鱈 muluel de mer、きゅうりうお espelankes、ちようぎめ estorjoun、ターボット turbiller、鱒 rais、食用テンダル tendal、くらげ geleis、かに crevis、めかじき rasours、鮫 chien de mer、葡萄酒漬いるか porpeis avec la purée、かき oistrez、紫貝 muscles、とりがい kochavon、にしん heranc blanc、燻製にしん heranc sor、それに、にしききゅうりうお es perlinge と小魚、その他の海の魚や河の魚も沢山にだよ。

この食事が全てととのうと客人は両手を洗い食卓に座る。食事を終えると女主人に次のような場所へ行く道を尋ねる：「此処からパリ近くのエタンプまでどのくらいあるのだね」「御客さん、ほんの10里ほどしかありませんよ」[fol.11<sup>v</sup>]  
「夜のうちに着けるかなあ」「え、お客さん、勿論ですとも」「えーとさて、此処からオルレアンまではどの位だろうか、どの道を通ればよいかな」「旦那さん、エタンプの町を馬でずっと過ぎてゆき、サンロイの門の方へおいでなさいまし、そこから町を離れて半里ほど行くと道が二つありますよ。一つは十字架のある道で一つは細い道です。十字架を右手に見て、緑の一番大きな道をお進みなさい。それからシャルトルの森の方へ道をとるんです。そこへ着きましたらその後すぐにボーシャテル・レ・プレという町に近付きますよ。すると真直ぐにオルレアンにむかっている街道が見えます。横道にはそれません。それをお望みでなければですがー」「さあ、テーブルを片付けてさっそく馬に乗ろう、そこで泊る前にまったく暗くなるだろうから」さて客は女主人に暇<sup>いとま</sup>を告げ、この言葉を言う：「奥さんではごきげんよう」「旦那さん、御幸せに御達者でいらっしゃいますように、なさること全てに御運がありますように、旦那様本当に御親切によくしていただいて有難うございます」〈あるいは〉「有難うございます旦那様、お目にかかった最初からずっと私共によくして下さった気取らぬ御親切、御心の広さに心から感謝いたします。いずれあなた様に御恩返しが出来ますように、まったくのところ旦那様、大変有難く存じております」そこで客は馬に乗り恋人の娘に接吻し[fol.12<sup>r</sup>]  
当座の費用にと30フランを渡してやさしく言う：「大切な連れ合いのいとしい恋人、又逢う日まであなたを神にお任せする。私はオルレアンへ行き少々気晴らしをしてくる。長くはかからないよ」

そしてこの主は馬<sup>あるじ</sup>で道を急ぎ、町の中へやってくると最初に出逢う人に訊くのだ：「もしもし、あなた」〈あるいは〉「御主人」〈あるいは〉「御子息、今は何時ですか」〈あるいは〉「時計が今何時を打ちましたかな」〈あるいは〉「いくつ時計が鳴りましたかな」「さあ、たしかに、よく分かりませんが 10時を打ったんだと思いますがー というのは、このつ

## La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

を打ってから充分一時間はたってますからね」「御若い方、有難う、神のお守りをー」「御主人、神が良い機会と祝福を与えられ、あらゆる危険から守られますように」

IV. さて次は肉体労働をする労働者や農業に従事する者たちの話し方を述べよう。

小農園で仕事をする者が土を掘り溝を作る土木工事人にこのように言う：「おい、お前、実のところ今週はいくら稼いだのだい」「いやあ、実際、今週一ぱい土掘りをやり、つるはしや棒ぐいを使って深い溝を掘ったのに、たった12ドニエの稼ぎだったのさ」「それはひどい！少ないな」「じゃあ、親方言つとくれ、あんたはいくら稼ぎなされた」「そりゃお前さんには教えてやる。これまでお目にかかったこともないような見事なつぎ木を庭の樹全部にやってな、そいつらは青々としてきたぜ。も一つの庭は土を掘り起こして[fol.12<sup>v</sup>]キャベツや葱、パセリ、セージ、それからほかの緑の香草をうまく植えたねえ、それからそのいらくさとか、しもつけそうとか悪い雑草をみんな引っこ抜いてきれいにし、種の良いのを沢山植えたんだがね、それからいろんな果物の樹、リンゴやら梨やらすももやら桜んぼやらくるみもそこいらきれいに剪定したってことよ。けどな、今週の稼ぎは30ドニエだけさ、いやしかし、先週も同じだけ稼いだから、まあ結構と喜んどのが」「まあ、そんなことはどうでもええ、今日この日手に入るものを稼がにゃ」「おや、あっちこっちの鐘楼で鐘が鳴ってるじゃねえか」「そうよ、明日はありがたい祝祭日だで。そろそろめしの時間だな」「その通りだ」〈あるいは〉「そうしよう」

そこで二人は食事をしようと連れ立って宿屋へ行く、宿につくとバターで味つけして脂ぎったベーコンと一緒に煮たキャベツ、ベーコンと白味も黄味もある殻つき卵が供される。二人の若僧は大層大食なので腹ペこを早いこと満たすためにむしゃむしゃと噛みもせずに食物をのみ込む。さてすっかり食べ終ると飼犬のマスチフ犬に骨を投げてやる[fol.13<sup>r</sup>]この恐ろしい犬はものすごい勢いで骨をかじる。犬共はお互いにふざけて戯れ始め、当然それは争いとなり、強い方が弱いのを地面に倒す。そうなると威勢の良い奴が相手に言う：「俺のマスチフの方がお前さんのより強いぜ、まあ犬は離して、我々も力づくで腕だめしをしよう、どっちかが地面に倒れるまでな」「俺達の方はやめとこうや、市場へ行って金槌と木槌を買うんでな。この前の時と同じ、先に降参した方がよいさ。あとは神だのみ、俺は行くぜ」

V. もう一つ別の話し方。

小麦をふるいにかけて荒挽きと精選とをよりわけているパン屋が従弟の一人に言う：「ピエール、塩を取れ、すぐに水を汲んで大鍋に入れて火にかけるんだ。今夜は粉を捏ねて

## La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

パン種のは入った9ブッシェルをベルボワさんとこのために焼くぞ。明日のサン・ミッシェルの祝日は御立派な奥方のギュネル様の御埋葬式さね、ベルボワの奥方様はこの前の十字架称賛の祭日にお亡くなりだ。」「親方、怒らんで下さい。両手に怪我をしちまったんで、ほんとに、水汲みができません」「何で又そんな怪我をしたのだ [fol.13<sup>v</sup>] お前はわざとする悪い奴だ」「本当なんです。両手で剣を持ってだち公とふざけていた時、右手をグサッとやられ、手の平を切って骨にとゞく程なんですから、僕の言ってるのが嘘でない証拠を見て下さい。」「なんてこった！ばかなことをしたもんだ、こんなに怪我するまでふざけるとは。今はお前の手があるのだよ、それなのにお前はぜんぜん役に立たん」「あゝ、それなら親方さん、心配ないですよ。治ってしまうまで僕のかわりの者をみつけますから」「本当にできるのか」「えゝできますとも、大丈夫です」「今にわかるだろ。しかしともかくこんな怪我をして困ったことだ、傷はかなり深いし、危いところだが、まあ元気を出せ。お蔭があれば直ぐにも治るだろう」

### VI. 今度は商人たちのもう一つの会話。

商人は年季奉公の見習いに言う：「ギョーム、どこにいるか」「御主人様、ここにおります」「私の所へおいで」〈あるいは〉「こっちへおいで」「旦那さん、はい只今」「お前は一体朝起きてからどこへ行っていたか。お前がちゃんとおったのなら私は朝から市へ出かけていたろうに、品物を売りに行こうと私が起きたのをお前は知つとるじゃないか。今週は [fol. 14<sup>r</sup>] お前にとって悪い週になるぞ、お前の馬鹿さ加減で今日はあきないを台なしにした」「何はともあれ、旦那さんが昨夜言<sup>ゆう</sup>い付けられた通りに、旦那さんの仕事をしてたのは御承知でしょう」「何を嘘を言う、身もちの悪いあばずれ娘たちと一緒にいたんだろ、錆びた鎌で顔でも切られるとよい。お前が馬鹿をやめぬなら、いづれはひどいことになるぞ」「とんでもない、そんな所にはいませんでしたよ」「お前は喉の奥で嘘をついておる。連中と一緒にいたのは分っている」「お願いします、そんなのじゃありません」「だまれ！悪魔にかけて！」〈あるいは〉「静かにせい、さもなくばこれから4日間身にしみて私を忘れんような平手打ちをくわせるぞ。本当だぞ、やって欲しいなら、たしかにやってやる」〈あるいは〉「うるさい」〈あるいは〉「さっさと出て行け」〈あるいは〉「ひどい目に逢うのが嫌なら口答えするな、これ以上つべこべ言えばお前はなぐりつけられて、3週間は私を忘れんようにしてやる。本当だからな、私は言うたことは絶対に守るのだ」「あゝ、おやさしい御主人様、すみません。お腹立ちのところをどうかお赦し下さい。 [fol.14<sup>v</sup>] 平身低頭お願いします。神かけて、もう決してあなた様に対し悪いことは致しません」「それでは行け、許してやる」「まことに有難うございます旦那様」

そこで奉公人は主人の品物を売るために市場へ行く。其処には様々の国から沢山の人が

商品を買おうとやってくる。見習いはその人たちにむかって礼儀正しくこのように言う：「さあ皆さん、こちらへどうぞ。この町で御みかけになるのと同様上等の布を御覧に入れましょう。ほかのどの町でもできない良い買物ですよ。さあお客さん、みて下さい。如何ですか」〈あるいは〉「さあお気に召しますか。此処に上等の赤紫のとえび茶のが、ございます。ほかにえも言われぬあらゆる色がありますよ、お好みを選んで貰いましょう」そこで客の商人が言う「この緋色のひと巻きはいくらするのか」とすると相手はこのように答える：「旦那、2000フランいただきます」「それゃ駄目だよ、あんた、そんなに払えると思うかい？このひと巻きで700フランは払うがねえ」「ねえお客さん、お見かけしたところ御立派で目がお高い。では一言、本当のところ言わせてもらいます。1500フランでどうぞ」「いやなかなか、どうあってもこれ以上は払えないね。それに、まだ高すぎる」「とんでもないです。旦那はちょっと手厳しい。しかし、いづれ又[fol.15<sup>r</sup>]今後も私の品をもっと買って貰えるでしょうから、では私の買った値でお願いします。つまり1200フランで…しかし今すぐお支払い願えるということ—」「さあ、それは心配しなさんな。神のお気に召せばすぐ支払うよ。支払い日を8月1日にしてくれんかね」「それはまことに、お気を悪くしないでいただきたいですが、そういうのはできません。私の立場がとてもひどい事になってもかまわん、というなら別ですが。貴方様の故で私のがのっぴきならぬひどい状態になるなんて、そうならば良いとはお考えじゃござんせんでしょう。と言いますのは、私は国の人たちに金を沢山借りており、それを今度のクリスマスまで借りている状態です。このために負債はあるわ、まさに祝祭日に支払うわという二重に重なった厳しい負目に縛られとります。ですから、その支払いを部分的に、あるいは全面的に怠るとすれば牢に入れられること請合いです。すっかり支払うと同意するまでは牢から出られませんや。そういうわけでして、旦那さん、心からお頼みしますよ、全額をすぐに払って貰いたいんです。もう待てぬという必要に迫られているんでして。[fol.15<sup>v</sup>]本当に旦那、この次は貴方様に喜んで同じ額をお貸しいたしますよ」「まあ、あんた、そう興奮せずに。では金の半分を払おうじゃないか。残り半分はだね、来たるクリスマスの聖ペテロ祭に耳を揃えて支払うという義務をまちがいなく履行しよう」「そうするとされるなら私も結構です。何としても引き延ばされるより今すぐ私の必要額を支払って欲しいんですが。しかしこれ以外にできんのでしたら、支払い日をお待ちするしかありません」さて、見習いが、買い手と全てを取り決めると次のように言う：「お優しいお客さん、それではこの品はお渡しします。本当に旦那さんは私が買った値段でお買いになりましたよ」〈あるいは〉「やれやれ、私が払ったと同じ値でお客さんは品物を手にいれましたね、さあ商品をお持ち下さい。それが私のものになる筈の利ざやを願わくば儲けられますように」「これはこれは親切に有難う。私があと二年このままに行けば、あんたの親切は無駄にはなりませんよ。お蔭があれば、私はお前さんに報いますからね」「旦那さん、[fol.16<sup>r</sup>]神の御加護を」「では、親切なお若いの、神がお守り

下さるように。」

\* \* \* \* \*

*La Manière de Langage*と呼ばれているフランス語の教本は14世紀後半にイングランドにおいて作成されたもので現在数種の写本が現存している。フランスの習慣や言葉の使い方に従い、美しいフランス語を正しく話し、正しく書くように *droit parler et écrire douz français*と、教えるものである。13世紀後半より14世紀にかけてフランス語を学習するイギリス人のためにフランス語教本が数多く作られた。それらは語彙集、文法書、会話と作文教本、書簡文範などであって筆者が訳を試みた *Manière* は会話とフランス語の書き方を教えている。*Manière* を作成したのはイギリス人であろう、しかし名も不明である。教本の後半になってKirnyngtonという名が現われるがこれは写字生の名であろうと見做されている。see : Paul Meyer, *La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français : Modèles de conversations composés en Angleterre à la fin du xiv<sup>e</sup> siècle, et publiés d'après le MS. du Musée Britannique Harley 3988, Paris 1873. p. 373*

作者はフランスに滞在したであろうし、当時のフランスの日常的な社会事情にも詳しいようであるが、この時代の他の「フランス語教本」にも見られる如く、アングロノルマン語の特徴が教本の中に散見される。文章の中にも英語の表現法をそのままフランス語に直訳したような言い回しが現れる。例えば、*pourquoi* のかわりに英語の *why* をそのまま訳したような *quoi* が続出するし、*il est bien temps* のかわりに *il est haut temps* (it is high time) と言い、*combien* は *quant bien* (how much) となり、*surveiller* のかわりに *surveoir* (survey)、*Aportez nous bientôt* のかわりに *Aportez nous une fois* (bring at once) と言う。また、綴り方が定まっていないという面も大いにあるけれども日常に用いる用具の名や、御馳走に供せられる魚の名前などには大陸フランス語に現れない綴りや表現が頻出し、訳者を大いに悩ませる。これらは当時のイギリスの美しく、正しいフランス語なのであろう。

会話の主題はもちろん日常の関心事におかれてある。現実に生活する人々に役立つためのフランス語であるから、この教本に展開される世界はロマンスの美しい架空の社会ではない。生々しく、活気溢れる人たちの息づく生活の断片が我々の目に飛び込んでくる。<sup>あるじ</sup>主が従僕や召使いをどのように叱責するか、そして召使いはどのように答えるか、という状況や、お大盡様の旅の遊興、職人たちの些細な楽しみ、それに商売の売り方、買い方の巧妙なやりとりが面白おかしく語られる。面白くなければ言葉は覚えられない、と言ったのはラブレールであったか。

文法教本と合わせてこのような話し方、書き方のマニュアルをつけておくという事も当時は行なわれたようだ。イングランドで *incunabula* が出回るようになるとラテン語で解説をほどこした英語の文法書が書かれるようになる。*Grammatica nova Anglicana* と呼

La Manière de Langage qui enseigne à parler et à écrire le français

ばれるものであるが、それら英語文法教本には Manière を模倣したらしい Dialogue も付してある。曰く、道を尋ねる場合、宿屋で宿泊する場合、品物を売買する場合というような状況設定で会話文が続いている。しかしこれにはフランス語の Manière に見られるようなふざけたところがみられない。Manière に現われる雰囲気はガルガンチュアやパンタグリユエルの世界へとやがて通じてゆく様相を呈しているが、ひとたび一つの主題について話し始めると際限なくただらと陳述が続くという手法は英会話本には現われない。イギリスらしいと言おうか会話の全てが上品にとり澄まして仕組まれている。フランス語の会話教本とそれらを手本として作成されたような英語の会話教本を比較研究することも、彼等の現実的な趣味嗜好を知る上で興味ある問題となる。

*LA MANIÈRE DE LANGAGE*

British Library MS Harley 3988

(fols. 1<sup>r</sup>—16<sup>r</sup>)

Reproduced by permission of the British Library